

問われた<言葉>-太宰治「竹青」論

著者	江 明瑾
雑誌名	日本文芸論叢
巻	19
ページ	28-41
発行年	2010-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/55030

問われた〈言葉〉——太宰治「竹青」論

江 明 瑾

一、はじめに

太宰治の「竹青—新曲聊斎志異」（以下「竹青」と称する）は、昭和二十年四月発行の雑誌『文芸』第二巻第四号の「作品特輯」欄に発表された作品である。中国清代の作家蒲松齡の怪奇小説集『聊斎志異』に収められた「竹青」の翻案小説であり、太宰執筆の「創作年表」に基づき、日本語版が上梓される以前に、「竹青」の漢訳版が中国語文芸雑誌「大東亜文学」に掲載されたと考えられてきたが、現時点ではその漢訳は見当たらない。¹⁾

中国・西洋文学や日本古典文学に取材する創作方法は、中期の太宰治の文学において頻繁に使われる手法である。特に「竹青」を発表する前後の時期に、太宰は一連の翻案小説を書き上げ、昭和十八年九月に『吾妻鏡』に取材する『右大臣実朝』を完成し、その翌年から西鶴の諸作品を題材とする『新釈諸国噺』十二篇を続々と書き上げた。「竹青」を刊行した後は、日本の昔話を翻案した『お伽草紙』が発表された。この時期の太宰の一連の翻案作品を論じる際、戦時下という時代背景の影響が重要な要素の一つとしてよく挙げられる。これまでの「竹青」の研究の中心は、原典である『聊斎志異』

との比較を通じて、中期、あるいは戦時下の太宰の態度を究明することにあつたと言うことが出来る。近年は、原典との比較とは別に、単独で太宰治の「竹青」を論じた先行論もある。例えば登場人物の関係論そして作品中の「夢」の構造を中心に検討する池川敬司氏の論や、物語の結末における魚容の現実への回帰に焦点を当て、太宰の「郷愁」が作品に変形される過程に注目する祝振媛氏の論は、「竹青」を作品論の角度から新たに検討する傾向を示す。

一方、「竹青」と同時期の翻案作品との関わりについて、『お伽草紙』との主題の類似もしばしば先行研究で指摘される。佐藤義雄氏は「竹青」と『お伽草紙』との類似性に着目して、「とりわけ方法的（或は構成的）な面では殆んど同一のもの」と述べる。藤原耕作氏は、「竹青」の結末によって示される「現実肯定」は『お伽草紙』にも見られ、「この時期一貫している」太宰の考え方であると言う。両氏とも、「竹青」における魚容の鳥世界の遠遊、そして現実世界へ帰還する結末による「竹青」の現実肯定という主題を指摘しており、それは『お伽草紙』へと繋がっていくと思われる。

このように、「竹青」のモチーフを検討する際に、作品の最後で魚容が湖南に戻り、妻と一緒に平凡な生活を送るという結末は先行研究においてよく注目され、その結末を、「妻と平凡な家庭生活をする処に人間の幸福がある」（大塚繁樹）、「故郷に戻って、故郷の風土と一体化することである」（祝振媛）、「現実肯定」（藤原耕作）、「現実には没頭して生きるほかはない」（菊田義孝）などと捉えられているように中期太宰の〈現実肯定〉の心理と結び付けて捉える傾向が見える。確かに「竹青」の結末部では、

れいの御自慢の「君子の道」も以後はいつさい口にせず、ただ黙々と相変らずの貧しいその日暮しを続け、親戚の者たちにはやはり一向に敬せられなかつたが、格別それを気にするふうも無く、極めて平凡な一田夫として俗塵に埋もれた。

と描かれてあり、冒頭部の魚容のあり方と対照すれば、最後に「君子の道」という理想を口にせず、平凡な一田夫として俗塵に埋もれたという魚容の外的な変化を、〈現実肯定〉というモチーフに帰結させるのはむしろ自然であろう。ただし、ここで注目しておきたいのは、魚容が一田夫としての現実を受け入れたという表現とともに、息子の名前「漢産」の由来、そして「神鳥の思ひ出」、自慢の「君子の道」を語らない一面も結末部に提示されていることである。このような結末部は一体どういう意味を持つのだろうか。また、作品において〈言葉〉はどのような存在なのか、太宰文学の中でどのように位置付けられるのか、本論文は以上の問題意識を抱えて、作品

の検討を進めることにしたい。

二、太宰治「竹青」と『聊齋志異』『竹青』との相違から

太宰治「竹青」の検討に入る前に、まず原典『聊齋志異』の本文との相違をまとめてみる。また、原典との相違を踏まえた上で、あらためて太宰治「竹青」における〈言葉〉の役割を考察していきたい。なお、引用された『聊齋志異』の版本について、小山清、菊田義孝などの複数の太宰の友人の証言によれば、当時太宰が参考にしたのは、昭和四年、北隆堂書店が刊行した公田連太郎註、田中貢太郎訳の『聊齋志異』であるという。¹¹この本は、『支那文学大観第十二巻 聊齋志異』（支那文学大観刊行会 一九二六年）と同内容の改装版である。本論においても『支那文学大観第十二巻 聊齋志異』（支那文学大観刊行会 一九二六年）を参照・引用することにする。では、原典との物語の相違について、以下の三点にまとめることができる。

①再会の場面。『聊齋志異』の原文では魚容が一回の科擧の落第を経たが、後は官僚になって竹青と再会した。一方、太宰治「竹青」の魚容は連続二回の科擧失敗を経験して、失意のままで竹青と再び逢った。

②漢陽で故郷のことを思い出す場面。竹青の漢陽の住居で楽しい生活を味わった魚容は、ふと故郷のことを思い出した。そんな魚容に対して、『聊齋志異』の竹青は黒い衣服を送って、魚を

湖南と漢水との間を自由に往復できるようにさせる。太宰治の竹青は「奥さんを憎まず怨まず呪はず、一生涯、労苦をわかち合つて共に暮して行く」ことが魚容の〈本心の理想〉であると言ひ、魚を故郷へ帰還させる。

③物語の結末。『聊齋志異』の魚容は本妻の和氏がなくなつた後、竹青との間に生れた長男漢産を家に残して、自分は他の二人の子を連れ、家を出てそれから帰らなかつた。太宰治の魚容は、故郷に戻ると、元の悪妻が竹青のように変身していた。その後妻との間に「漢産」という美しい男の子をもうけ、「極めて平凡な一田夫として俗塵に埋もれた」のである。

以上に示したように、神女竹青との関係性、そして故郷に戻つた魚容の結末という太宰のオリジナリティーを示す部分は従来も注目されており、「竹青」のモチーフを考える際の重要な手掛かりとして扱われている。こうした先行論の方法に対して、本論は特に異論を唱えるつもりはない。ただし、物語のオリジナリティーをなす部分の他に、本論は太宰「竹青」における〈言葉〉に関する独特な表現も視野に入りたい。この部分を考察するため、まず『聊齋志異』「竹青」の中国語原文と日本語訳文の相違から検討していきたい。

『聊齋志異』の中国語原文は文言的・簡潔な表現を使用し、動作と発話の主語も省略されるため、物語のリズムが速くなり、不思議なことが次々と出てくる印象を与えるが、理解しにくい部分もある。しかし、田中貢太郎の日本語訳文は口語的な表現で原文を訳し、会話の部分も独立した形で表記し、誰の発話かをはっきり提示する。また、日本人読者の物語への理解を深めるために、原文にない説明

を付け加えている。この部分について具体的な例をあげて日本語訳文の特徴を説明する。例えば魚容が初めて鴉へ変身する経緯は、中国語の原文では以下のように描かれる。

魚容、湖南人。談者忘其郡邑。家甚貧。下第歸。資斧斷絕。羞于行乞。餓甚。暫憩吳王廟中。因以憤懣之詞。拜禱神坐。出臥廊下。忽一人引去。見吳王。跪曰。衣隊尚缺一卒。可使補缺。吳王可。即授衣。既著身。化為烏。

語り手は物語の冒頭にだけ魚容の名を記し、その後の動作と発話は全て主語が欠ける状態である。言い換えれば、『聊齋志異』「竹青」の中国語原文では、語り手は自分の感情を語りとして折り込むことなく、あくまで第三者の立場で作中人物の言動を忠実に伝える。ところが、日本語訳は、この部分を以下のように訳している。

魚容①と云う秀才があつた。湖南の人であつたが、この話をした者が忘れてゐたから郡や村の名は解らない。ただ家が極めて貧乏で、文官試験に落第して帰つてゐる途中で旅費が盡きてしまつた。それでも人に物を乞ひ歩くのは羞かしくてできない。ひもじくなつて歩かれないやうになつたので、暫く休むつもりで吳王廟の中へ入つて往つた。②そこは洞庭のうちになつた楚江の富池鎮であつた。吳王廟は三國時代の吳の甘寧將軍を祀つたもので、水路を守る神とせられてゐた。廟の傍の林には數百の鴉が棲んでゐて、その前を往来する舟を數里の先まで迎へに

往つて、舟の上に群がり飛ぶので、舟から肉を投げてあげてやるといち啄でうけて、下に墜すやうなことはなかつた。舟の人はそれを吳王の神鵝と云つてゐた。

③落第して餓ゑてゐる男は、何を見ても聞いても癪にさはらないものはなかつた。魚は吳王の神像の前へ往つて不平満々たる詞で折つた後で廊下へ往つて寝てゐた。と、何人かが来て魚に來いと云うので隨いて往つた。そこは吳王の前であつた。魚を伴れて往つた者は、ひざまづいて云つた。

「黒衣隊がまだ一人缺けてをりますが、補充致しませうか」

④「それがよからう」

吳王の許しが出たので、その者から魚に衣服をくれた。魚は言われるままにそれを着ると、そのまま鵝になつた。

傍線の部分は中国語原文にない表現である。①は魚容の才能に關する説明である。②は頭注の「吳王廟」に対する説明を本文に採り入れ、中国の地名をあまり認識していない日本人読者にある程度の知識を与える。③は中国語原文にない語り手の魚容の氣持の解釈である。④は原文の「吳王可」の表現を對話の形で示す。つまり、原文では語り手によって説明されていた登場人物のあり方は、ここでそれぞれの登場人物の「言葉」¹³として示されるようになった。こうした原文にない登場人物の「言葉」による表現は随所にある。このように、田中貢太郎が訳する『聊齋志異』『竹青』は中国地名の解釈や作中人物の心情の説明などの語り手の役割を増幅し、登場人物の「言葉」を直接に示す表現法を使用して、原文の理解にくい部

分を補足する。

一方、太宰治「竹青」では、田中貢太郎の訳文と同じく、会話の部分¹⁴を独立に表現する特徴や、「吳王廟」に対する説明などの表現も見られるから、『聊齋志異』の日本語訳文での語り手の役割の増幅、登場人物の「言葉」による表現法の使用を受容していると考えられる。ただし、太宰治「竹青」は、単に田中訳文を受容するだけではなく、さらに作者の「空想」や「感懷」を加えて、登場人物の発する「言葉」による表現法を際立たせている。次の節では、登場人物の発する「言葉」を太宰治「竹青」を究明する重要な手掛りとして、改めて考察していきたい。

三、太宰治「竹青」——「語る男」としての魚容

右に述べたように、田中貢太郎の日本語訳文は、動作や発話の言語が省略されることの多い中国語原文をより理解しやすくするために、原文で語り手の描写や説明によって示されていた登場人物の姿が、日本語訳文の中でそれぞれの登場人物の「言葉」で表現することになった。それに対して、太宰治「竹青」の中では、登場人物の「言葉」の存在自体にも重要な意味が付与されていると言える。

主人公魚容に関する描写を見ると、まず無視できないのは、その言葉の多さである。その言葉の多さを強調する描写は、作品全体にわたって頻繁に現れている。まず魚容一人の場面においても、「小声」で漢詩を吟じたり、「からすには、貧富が無くて、仕合せだなあ」などと現実への鬱憤を呟く独自の場面が多く描かれてあり、ま

た語り手に度々「讒言」「口癖」「余計」と形容されたその謝り癖も、魚容の〈言葉〉の多さを強調している。以上から見ると、太宰治「竹青」の中では、魚容は〈語る男〉として呈示されていることが確認できる。では、魚容が語った〈言葉〉は、一体どういう性格を持つだろうか。テクストの前半にある魚容と妻との会話場面を見て確認しよう。

女は酒くらひの伯父の妾であつたといふ噂もあり、顔も醜いが、心もあまり結構でなかつた。魚容の学問を頭から軽蔑して、魚容が「大学の道は至善に止るに在り」と口ずさむのを聞いて、ふんと鼻で笑ひ、「そんな至善なんでもものに止るよりは、お金に止つて、おいしい御馳走に止る工夫でもする事だ」とにくにくしげに言つて、「あなた、すみませんが、これをみな洗濯して下さいな。少しは家事の手助けもするものです」と魚容の顔をめがけて女のよこれ物を投げつける。魚容はそのよこれ物をかかへて裏の河原におもむき、「馬嘶で白日暮れ、剣鳴て秋氣来る」と小声で吟じ、さて、何の面白い事もなく、わが故土にゐながらも天涯の孤客の如く、心は渺として空しく河上を徘徊するといふ間の抜けた有様であつた。

学問に志している貧書生魚容が、日常生活の中で『大学』の章句を「口ずさむ」のは、特に不自然な設定ではない。経書を無意識に「口ずさむ」という魚容の言語行為は、儒教の経書が既にな彼の中で内面化されていたことを示しているといえよう。ところが、ここで

気になるのは、妻と一緒にになると、魚容はかえつて無口になったところである。先の場面では、自分の口ずさんだことに對して、妻がにくにくしい言葉を発したが、魚容は何の反論もなく、ただ彼女の言う通りに洗濯物を抱えて河原に向かい、そこで一人で漢詩を「小声で吟じ」たのである。つまり、この場面での魚容の〈言葉〉は、物語内のほかの登場人物と意志を疎通するための伝達機能を果たすものというより、彼の内面を示す媒体としての存在であるといえよう。次の場面では、魚容は郷試に應じる決意を述べ、家を飛び出したことが描かれる。その後、試験に落第した魚容は、洞庭湖の呉王廟の廊下で寝転んで、一人で自身の運命を嘆いた。

あああ、この世とは、ただ人を無意味に苦しめるだけのところだ。乃公の如きは幼少の頃より、もつぱら其の独りを慎んで古聖賢の道を究め、学んで而して時に之を習つても、遠方から福音の訪れ来る気配はさらに無く、毎日毎日、忍び難い侮辱ばかり受けて、大勇猛心を起して郷試に應じても無慙の失敗をするし、この世には鉄面皮の悪人ばかり榮えて、乃公の如き気の弱い貧書生は永遠の敗者として嘲笑せられるだけのものか。女房をぶん殴つて颯爽と家を出たところまではよかつたが、試験に落第して帰つたのでは、どんなに強く女房に罵倒せられるかわからない。ああ、いつそ死にたい

この嘆きでは、魚容の知識人としての理想と挫折、そして周りの人に軽蔑されている現実から脱出したいという欲望がありありと示

されている。一方、「仰向に寝ころび」という姿勢で発せられた先の言葉は、特定の〈誰〉かに向けて話しかける言葉ではなく、むしろ自分を苦しめる現実その全体に対する独白の言葉であろう。また、「空飛ぶ鳥の大群を見上げ」て、「からすには、貧富が無くて、仕合せだなあ」と「小声」で言った場面や、鳥の群れが天空を飛び廻っている様子を「うらやましがり」、「鳥は仕合せだなあ」と「哀れな細い声で呟く」場面においては、その魚容の言葉は、鳥世界への憧れの現れであるとともに、自分を苦しめる現実に対する独白の言葉とも捉えられる。

このように、魚容の独白の言葉は、現実に対する、彼の切実な内面を伝えるものとして発せられる。そして、彼の内面の気持もその独白の言葉を通じて、そのまま物語を読む読者に直接に届けられるのである。結局、〈語る男〉としての魚容が発する〈言葉〉自体は、物語内の他の登場人物と意志を疎通する機能を十分に発揮することなく、その代わりに独白の形で彼の気持を明瞭に伝える役割を持っているのである。

四、〈言葉〉の虚偽性

その一方で、魚容の〈言葉〉が空虚で虚偽をはらむものであることが、物語の進行の中で随処に提示されている。まず、語り手に「謔言」「余計」と形容された彼の謝り癖の部分から検討したい。

「竹青」の中で初めて魚容の謝り癖を描く所は、一回目の郷試落第の後、一人で呉王廟の廊下でうとうとした魚容が、黒衣の男と出

会った場面にある。

その時、「もし、もし。」と黒衣の男にゆり出されたのである。
魚容は未だ夢心地で、

「ああ、すみません。叱らないで下さい。あやしい者ではありません。もう少しここに寝かせて置いて下さい。どうか、叱らないで下さい。」と小さい時からた人に叱られて育つて来たので、人を見ると自分を叱るのではないかと怯える卑屈な癖が身についてゐて、この時も、謔言のやうに「すみません」を連発しながら寝返りを打つて、また眼をつぶる。

見知らぬ男に起こされた魚容は、相手が自分を起こした理由を聞こうとせず、ただ「すみません」「叱らないで下さい」と言う。その魚容の言葉は、他人と意志を疎通する機能を持っていない、ただの独り言に等しいものと捉えられる。さらに語り手に「謔言」と形容された魚容の「すみません」の連発を、「寝返りを打つて、また眼をつぶる」という彼の実際の行動と合わせて見ると、その「すみません」という言葉は、目の前にいる相手に対して心から謝るのではなく、単に無意識に謝り言葉を並べてその場を凌ごうとしただけであることは明らかである。ところが、魚容自身は、このような、本心が含まれてない言葉の虚偽を全く意識していない。むしろ、物語の語り手がその言葉の虚偽を暴き出しているといえよう。別の場面にもこのような構図が繰り返されている。

「あなた、」と艶なる女性の声がして、「お氣に召しまして？」

見ると、自分と同じ枝に雌の鳥が一羽とまつてゐる。

「おそれいます。」魚容は一揖して、「何せどうも、身は軽くして泥滓を離れたのですからなあ。叱らないで下さいよ。」とつい口癖になつてゐるので、余計な一言を附加へた。

相手に叱られてないのに、「叱らないで下さいよ」と付け加えた

魚容の言葉は、まさに語り手の言う通り「余計な一言」でしかない。結局、魚容の「叱らないで下さいよ」には、相手に對して赦しを求めるという意味を全く含まず、ただ無意識に口から出す「口癖」である。そしてそのことを、語り手は見逃さず、「余計な一言」とはつきり魚容の言葉の空虚を暴いている。このように、自身の〈言葉〉の空虚・虚偽を意識していない魚容／意識している語り手という構図は「竹青」の中に繰り返して出てくる。つまり〈語る男〉魚容の言葉に對して、語り手はつねに冷静な目でその言葉の内実を判断している。前述の「叱らないで下さいよ」や「すみません」などの謝り癖のほか、魚容がよく口に出している漢籍の引用癖も、語り手の指摘する焦点の一つである。

①「漢陽は、遠いなあ。」いづれが誘ふともなく二人ならんで廟の廊下から出て月下の湖畔を逍遙しながら、「父母在せば遠く遊ばず、遊ぶに必ず方有り、といふからねえ。」魚容は、もつともらしい顔をして、れの如くその学徳の片鱗を示した。

「何をおつしやるの。あなたには、お父さんもお母さんも無いく

せに。」

②魚容は、ぎやふんとまるめて、やぶれかぶれになり、

「よし、行かう。漢陽に行かう。連れて行つてくれ。逝者は斯の

如き夫、昼夜を捨てず。」てれ隠しに、甚だ唐突な詩句を誦して、

あははは、と自らを嘲つた。

③「まだ、夜が明けぬのか。」魚容は間の抜けた質問を發した。

「あら、いやだわ。」と竹青は少し顔をあからめて、「暗いほうが、恥かしくなくていいと思つて。」と小声で言つた。

「君子の道は闇然たり、か。」魚容は苦笑して、つまらぬ洒落を言ひ、

引用①では、一緒に漢陽に行こうという竹青の誘いに對して、魚容はまず「遠い」と言い、そして『論語』の章句を引用して竹青に断ろうとした。その言葉にすぐ続くのは、「もつともらしい顔をして、れの如くその学徳の片鱗を示した」という、語り手によるその態度に関する注解である。この語り手のコメントを通じて、漢籍を引用して自身の言葉に正当性を付与しようとする魚容のあり方が示される一方、竹青の「何をおつしやるの。あなたには、お父さんもお母さんも無いくせに。」という反論は、「れの如くその学徳の片鱗を示した」魚容の言葉の虚偽を容赦なく露呈させている。この場面においては、語り手の描写と竹青の反論と合せて、一見正当的な魚容の言葉に潜む虚偽が暴かれている。そして右の引用②では、

竹青に「郷原」と指摘された魚容は、一時反論もできず、「やぶれかぶれ」になった状態で、いつものように『論語』の章句を引用した。ところが、魚容のこの言葉に対し、語り手は「てれ隠しに、甚だ唐突な詩句を誦して」と、自分の本心を含まず、漢籍の章句を隠れ笠として使う魚容の言葉の唐突さを指摘している。さらに、引用③では、竹青の「暗いほうが、恥かしくなくいいと思つて」という恥かしがる言葉に対して、『大学』の章句を引用して答えた魚容の言葉が、語り手に「つまらぬ洒落」と指摘される。つまり、語り手は魚容のこの言葉を無意味な冗談、言い換えれば本心を含まない、空虚な言葉として捉えていることが分かる。

このように、多くの言葉で自身の気持を語る魚容のあり方と対照的に、「竹青」の語り手は常に魚容の言葉と距離を置き、冷静にその言葉の内実を分析するように設定されているのである。こうした魚容の言葉と語り手の説明との関係性の中で、本人が意識していない自身の言葉の空虚・虚偽が、語り手を通じて、次々と読者の前に曝されるのである。そして、こうした語り手の説明の存在によって、読者はつねに魚容の言葉の信憑性を考えさせられることになる。

その一方で、この三つの場面における魚容の漢籍の章句を引用した行動をあらためて見ると、彼に引用された章句の内容は、いずれも周りの現実状況と直接な関連がないものであることが分かる。引用①では、竹青の誘いを断ろうとして、『論語』里仁篇の「父母在せば遠く遊ばず、遊ぶに必ず方有り」という章句を引用した。ところが、両親が早く亡くなった魚容にとって、その章句の内容自体は既に現在の魚容と無関係であり、それを持ち出したのは、漢陽に行

きたくない彼が話の焦点をずらしたためであることが窺われる。そして引用②では、竹青に「郷原」と指摘された魚容が、漢陽に行くことを決意し承諾した後に、「逝者は斯の如き夫、昼夜を捨てず」という『論語』子罕篇の章句を引用したのである。その章句の内容は孔子が過ぎ去った歳月を嘆くものであるが、竹青の言葉に圧倒され、やむを得ず漢陽に行くことを承諾したという魚容の現在の状況とずれている。それを口にしたのは、漢陽に行くことになったという現実の状況から目を逸らしたために、敢えてその漢籍の章句を引用したのであろう。最後に引用③では、竹青の恥かしがる言葉に対し、魚容は「君子の道は闊然たり、か」という『中庸』の章句を引用した。その章句の原文は「故君子之道、闊然而日章」であり、意味は「君子の守り行う道は、（ちょっとと見ただけでは）まっくらで（何もわからないが）、日がたつにつれて（その善さが）あざやかになる」というものである。この魚容の言葉は、その直前の竹青の「暗いほうが、恥かしくなくいいと思つて」という言葉に含まれた意味から完全にずれたものである。言い換えれば、魚容がこの『中庸』の章句を口にしたのは、自分の間拔けた質問と竹青の言葉が作り出した状況から話の焦点をずらそうとしたためであらう。

このように、目前の状況とずれている漢籍の章句を引用する魚容の言葉の中では、目の前にある現実から目を逸らしたい、という心理が働いていることが分かる。結局、こうした言葉を発する魚容は、結末部にある竹青の「学問も結構ですが、やたらに脱俗を銜うのは卑怯です」という言葉に示されたように、学問への志を唱えて自身の脱俗をひけらかしつつ、実は君子の道の言葉を口にするこ

つて、現実から目を逸らし続けている卑怯な人間でしかないのである。

五、おわりに――問われた〈言葉〉

失意の現実に対して〈言葉〉を自分の気持ちを洩らすために用いながら、自身の言葉に含まれる空虚・虚偽を全く意識していなかった魚容は、物語の後半にいたって初めて転機を迎えることになる。それは、彼が自分の言葉に潜んだ真実の気持ちに気付いた瞬間の場面にある。太宰治「竹青」と、原典『聊齋志異』の決定的な差異はまさにここから展開されるといえる。

「ああ、いい景色だ。くのに女房にも、いちど見せたいなあ。」
魚容は思はずさう言つてしまつて、愕然とした。乃公は未だあの醜い女房を愛してゐるのか、とわが胸に尋ねた。さうして、急になぜだか、泣きたくなつた。

これまで自分を苛める存在として妻のことを語ってきた魚容が、漢水の美景を目の前にして、思わず言ったのは「くのに女房にも、いちど見せたいなあ」という言葉であつた。そして自分の言った言葉の内容に気付いた瞬間、まず「愕然とし」、続いて「乃公は未だあの醜い女房を愛してゐるのか」と自分に自身の真実の気持ちを問ひかける。その答えは、言葉で表現されるのではなく、「急になぜだか、泣きたくなつた」という反応として示される。つまり、ここで

は、言葉より「泣きたくなつた」という魚容の反応こそが、その真実の気持ちを代弁するものとしてであると捉えることができるだろう。魚容の「愕然」も、これまで意識していなかった、自身の言葉に潜んだ真実の気持ちに初めて気付いた証であらう。

一方、魚容の「ああ、いい景色だ。くのに女房にも、いちど見せたいなあ。」という言葉を実際の気持ちを込めた言葉として受け取った竹青は、自分が神女で、これまで魚容が体験していた鳥世界や漢水の生活はすべて神から用意された試験であることを明かし、「お帰るなさい。あなたは、神の試験には見事に及第なさいました」と魚容の運命の行方を宣告して、彼を故郷に帰還させる。そして故郷のわが家で彼を待っているのは、竹青にそっくりとなつた妻である。

あたしはあなたの留守に大病して、ひどい熱を出して、誰もわたしを看病してくれる人がなくて、しみじみあなたが恋ひしくなつて、あたしが今まであなたを馬鹿にしてゐたのは本当に間違つた事だつたと後悔して、あなたのお帰りを、どんなにお待ちしてゐたかわかりません。（中略）あたしは顔ばかりでなく、からだ全体變つたのよ。それから、心も變つたのよ。あたしは悪かつたわ。でも、過去のあたしの悪事は、あの青い水と一緒にみんな流れ出てしまつたのですから、あなたも昔の事は忘れて、あたしをゆるして、あなたのお傍に一生置いてくださいな。

魚容の「やあ、竹青」という呼びかけに対して、妻は「何をおつしやるの」と否定し、右のように語る。これまで魚容の学問を軽蔑

したり、洗濯物を彼に投げつけたりしていた妻は、大病を患ったことがきっかけで、魚容のことを「恋しくなつて」、彼を馬鹿にしていたことを後悔したという。そして「顔ばかりでなく、からだ全体変つた」、「それから、心も変つた」と、綺麗に変身した妻は「あなたのお傍に一生置いてください」と魚容に語る。この言葉から、これまで他人と同じように魚容を軽蔑していた過去の自分と一線を画して、魚容の存在を心から受け入れるようになった妻の気持が読み取れるだろう。そして、こうした妻の言葉は、漢水の美景を故郷の妻に見せたいと言つた魚容の「あの醜い女房を愛してゐる」という真実の気持に込めたと見える。一年後に、魚容と妻の間に「玉のやうな美しい男子」が生まれたという事実は、かつて分かれていた二人の気持が溶け合わされたことを象徴しているといえよう。

先の竹青の論し、そして妻の変身の部分は、原典『聊齋志異』の物語と比べて、最も大きく変更された部分である。原典の中では、竹青が神女であることは変らないが、彼女の協力で魚容は本妻が亡くなるまでの長い間、漢水の別宅と湖南の本宅を往復する生活ができることになる。つまり『聊齋志異』では魚容を、本妻のいる故郷湖南と神女竹青のいる漢水のどちらかを選択しなければならぬ窮地に立たせなかったのである。この原典との最大の差異にこそ、太宰治『竹青』の創作精神が含まれていると従来¹⁷⁾の先行論は指摘してきた。確かに、太宰治『竹青』では竹青の論しの場面まで、原典との間にいくつかの細かい表現上の差異があるとしても、物語内容の面では大きな変更がない。結末のあまりに大きな差異から、先行論が指摘した通り、その部分は太宰独自の創作であることは間違ひな

いと思われる。ただし、本論が注目したいのは、物語内容の差異ではなく、竹青の〈言葉〉と妻の〈言葉〉、さらに語り手の描写によつて構成された結末の表現形式の意味である。

一年後、玉のやうな美しい男子が生れた。魚容はその子に「漢産」といふ名をつけた。その名の由来は最愛の女房にも明さなかつた。神鳥の思ひ出と共に、それは魚容の胸中の尊い秘密として一生、誰にも語らず、また、れいの御自慢の「君子の道」も以後いつさい口にせず、ただ黙々と相変らずの貧しいその日暮しを続け、親戚の者たちにはやはり一向敬せられなかつたが、格別それを気にするふうも無く、極めて平凡な一田夫として俗塵に埋もれた。

結末部の最後に「ただ黙々と相変らずの貧しいその日暮しを続け」、親戚に軽蔑されても「格別それを気にするふうも無く」「極めて平凡な一田夫として俗塵に埋もれた」と語られた魚容の姿は、竹青の「人間は一生、人間の愛憎の中で苦しまなければならぬのです」「もつと、むきになつて、この俗世間を愛惜し、愁殺し、一生そこに没頭してみて下さい」という〈言葉〉を素直に受け入れ、自身を取り巻く平凡な現実を肯定する姿勢と読み取れる。一方、自分の息子に「漢産」という名前を付けたことや、「神鳥の思ひ出」を「胸中の尊い秘密」としたことは、かつて憶れていた鳥の世界を忘れていない証拠と見える。ただし、かつての自分と違って、現在の魚容はその憧れの気持ちを安易に〈言葉〉に託して表すのではなく、

逆に胸中の「尊い秘密」として誰にも語らない。また、竹青に「やたらに脱俗を衒うのは卑怯です」と指摘された「御自慢の『君子の道』を「いつさいに口に」しないことになったという魚容の姿は、虚偽的な〈言葉〉を駆使して現実から目を逸らしたという過去の卑怯な自分と訣別して、竹青の言う通りに現実に没頭しているように捉えられる。このように、結末部に描かれた魚容の言葉の変化を通じて、竹青の〈言葉〉を受け入れ、これまで目を背けていた現実と向き合って生きていく人生を選んだ魚容のあり方が浮き彫りにされるのである。

昭和十五年十一月二十五日、太宰が「独語いつ時」(『帝国大学新聞』第八百三十三号)という随筆を発表した。この随筆の中では、

信じるより他は無いと思ふ。私は、馬鹿正直に信じる。ロマンチズムに拠つて、夢の力に拠つて、難関を突破しようと思つてゐる時、よせ、よせ、帯がほどけてゐるぢやないかと人の悪い忠告は、言ふものでない。信頼して、ついて行くのが一等正しい。運命を共にするのだ。一家庭に於いても、また友と友の間に於いても、同じ事が言へると思ふ。

信じる能力の無い国民は、敗北すると思ふ。だまつて信じて、だまつて生活をすすめて行くのが一等正しい。人の事をとやかく言ふよりは、自分のいたらくに就いて考へてみるがよい。

という時局との関連を匂わせる内容が綴られているが、その一方で、

「だまつて信じて、だまつて生活をすすめて行く」「人の事をとやかく言ふよりは、自分のいたらくに就いて考へてみるがよい」と語られる。そこに示された、不要な〈言葉〉を語るより、自分のいる現実をきちんと見据えて生きて行くという人間の姿勢は、「竹青」の結末部に描かれた魚容のあり方と共通していると思われる。竹青の語った言葉を受け入れ、「黙々と相変らずの貧しいその日暮しを続ける」ている魚容のあり方は、「だまつて生活をすすめて行く」という人間の姿勢と重なるものであるだろう。

これまで太宰治「竹青」は戦時下の〈現実肯定〉を唱える作品と扱われてきたのだが、主人公魚容の〈語る男〉というあり方から、現実と向き合つて〈言葉〉を現実逃避の道具として使わなくなった姿への変貌を描き出すこの作品は、太宰文学における〈言葉〉への拘りが一貫して窺われる作品といえよう。

【附記】「竹青」本文の引用は『太宰治全集7』(筑摩書房 一九九八年)、『聊齋志異』の引用は『支那文学大観第十二巻』(支那文学大観刊行会 一九二六年)に拠った。なお、引用に際しては、漢字の旧体字は必要に応じて新体字に改め、ルビは適宜省略した。また、引用文の傍線や数字などは引用者によるものとする。

注

(1) 山内祥史「解題」(『太宰治全集第七巻』 筑摩書房 一九九〇年)

(2) 例えは相馬正一『評伝太宰治 第三部』(筑摩書房 一九八五年)では、太宰の中期の創作手法について「現代ものを敬遠して史実・古典・説話などをパロディ化することで当局の目をくらます」と指摘する。その見方を継承する赤木孝之が

「大東亜戦争中の太宰は、〈史実・古典・説話など〉への逃避と、それに次いで時局への擦寄り——迎合——まではゆかない、との謂である——によって身を処しているといえよう」

『戦時下の太宰治』(武蔵野書房 一九九四年)というように、太宰が戦時下の現実を「逃避」「時局への擦寄り」のために現実と直接に関わらない素材を扱う傾向を指摘する。

(3) 太宰治「竹青」の研究の中で、大塚繁樹氏「太宰治『竹青』と中国の文献との関連」(『愛媛大学紀要』9 一九六三年)や鈴木二三男氏「太宰治と中国文学」(二)——『清貧譚』と

『竹青』——(『立正大学国語国文』第七号 一九六九年)、

村松定孝氏「太宰治と中国文学——『清貧譚』と『竹青』について」(『比較文学年誌』第五号 一九六九年)などの論は原典「聊齋志異」「竹青」との物語の差異を踏まえながら、作品に現れる太宰の人生観や家庭観を読み取る。

(4) 池川敬司「太宰治「竹青」を読む——魚容の〈身内世界〉への執着——」(『太宰治研究』一二 和泉書院 二〇〇四年)。

(5) 祝振媛「太宰治と中国——太宰の『竹青』の中の郷愁の世界を中心に——」(『国文学解釈と鑑賞 特集太宰治没後五〇年』至文堂 一九九八年)。

(6) 佐藤義雄「醗酵された別箇の物語——太宰治『お伽草紙』を

巡って——」(『京都教育大学紀要(人文社会)』55 一九七九年)。佐藤氏は「竹青」と『お伽草紙』の「瘤取り」、「浦島さん」、「舌切雀」との共通点を以下の五点でまとめた。

第一に、主人公達は家族や世間の徹底的な現実性に打ちひしがれ奇態な性行を余儀なく持たされており、第二に、それと関連して、強者・道学者に対し殆ど生理的と言って良い様な嫌悪を示している点にある。そして第三に、主人公達は己を取りまくかかる状況から脱出せんとしてユートピアに至り着き、第四には、第三の点と関連しているが、そこで主人公達は人間の相貌を超えた女人に遭遇し、しかし第五に、結局はそのユートピアに浸りきる事もできず、汚濁を知悉しつつ余りにも人間的な現実の世界に帰還してくる。

(7) 藤原耕作「太宰治『お伽草紙』論」(『国文学ノート』第二十七号 一九九三年)

(8) 菊田義孝『私の太宰治』(東京 大光社 一九六七年)

(9) 太宰の中期の文学は、昭和十三年の「満願」より昭和二十年の『お伽草紙』までと通説される。昭和十四年石原美智子との結婚に伴って実生活が安定し、女給との心中や麻薬中毒などの狂乱に満ちた前期の生活と比べて、中期太宰の実生活と心理が落ち着いた状態となる。こうした実生活の安定が文学作品に反映され、現実を受入れる傾向を示す作品が多く創作されるという見方は、例えば奥野健男「太宰治論」の「平凡なる小市民」、平野謙「太宰治論」の「常識的な生活者」(『文芸読本 太宰治』河出書房新社 一九七五年)、そして渡

部芳紀「太宰治論——中期を中心として」(『早稲田文学』一九七一年十一月号)の「素直、単純、正直」などの論がある。

- (10) 小山清「風貌——太宰治のこと——」(初出は『風雪』一九五〇年七月号、一九九七年六月に津軽書房から刊行された『風貌——太宰治のこと——』に再録された)、菊田義孝『私の太宰治』(大光社 一九六七年)。

- (11) 前掲菊田義孝の著書。

- (12) 山内祥史「太宰治についての発見——『太宰治全集』編纂の過程で」(『国文学』第三十六巻第四号 一九九一年)

- (13) 例えは大塚繁樹氏や祝振媛氏の論、大野正博「聊斎志異『竹青』について——太宰治『竹青』との比較——」(『集刊東洋学』第二十九号 一九七三年)の論である。

- (14) 例えは魚容と竹青の再会の場面において、原文で竹青の「別來無恙乎」という言葉に対し、「魚驚問之」、「詰所來」というように語り手の視点で描かれる表現は、訳文では以下のように変わる。

「お別れをしてから、御無事でしたか、」
と云った。魚はめんくらつて訊いた。

「あなたは、何人ですか、」(原文：「魚驚問之」)

「あなた、竹青をお忘れになつて、」

魚は喜んだ。

「何処から来たかね、」(原文：「詰所來」)

また、湖南へ行くか漢水へ行くかと魚容と竹青が争論する場

面において、原文で「生將偕與俱南。女欲與俱西。兩謀不決」と表現するが、訳文は以下のように描かれる。

そこで魚は竹青を自分の故郷へ伴れて往かうとした。

「南に往かうぢやないか、」(原文なし)

竹青は魚を漢水の方へ伴れて往かうとした。

「西に往かうぢやありませんか、」(原文なし)

その相談ができないうちに二人は寝つてしまつた。

- (15) 「竹青」と同じく『聊斎志異』から翻案された太宰の作品「清貧譚」(『新潮』第三十八年第一号 一九四一年)の中では、「聊斎志異の中の物語は、文学の古典といふよりは、故土の口碑に近いものだ」と私は思つてゐるので、その古い物語を骨子として、二十世紀の日本の作家が不逞の空想を案配し、かねて自己の感懷を託し以て創作也と讀者にすすめても、あながち深い罪にはなるまいと考へられる」と作家の創作スタンスが書かれている。

- (16) 赤塚忠『新釈漢文大系 第二巻大学中庸』(明治書院 一九六七年)

- (17) 前掲村松定孝の論では、この結末について「この結末は、いかにも唐突であるが、戦時下の文化統制をはばかって、魚容が妾をかまえることの不道德性をさけた」「夫婦の調和を重んじたメルヘン風な心なごむエピソード」と言及しつつ、「太宰なりの新体制がそこにある」と論じた。また、違う角度から、前掲大野正博の論では、太宰が「人間と仙界とを並存させるような大陸的発想を見出し、これに「罪」を感知した」

「その結果仙界をデーモンの世界に帰し竹青と和氏とを同一人物に帰結するというユニークな着想に到達した。仙界に生まれた双生児は抹殺され、ここに人界に基盤を置いた太宰の『竹青』が誕生した」と論じた。このように、異なる角度から分析されながらも、太宰「竹青」と『聊齋志異』「竹青」との結末の大きな差異に、太宰「竹青」の創作の主旨が含まれるという指摘が先行論の中で重ねられている。